

## 近世紀行文紹介(その七・山岳紀行の部)

板 坂 耀 子

(平成五年九月九日受理)

今回は登山の記事が登場する山岳紀行について紹介する。紙数の関係もあつて書誌的なことの詳細は省かせていただくこととする。「国書総目録」などの書名から山岳紀行ではないかと推測されるが、内容はまったく異なるものについても書名をあげてその旨を記した。また現在散逸して所在が確認できないものは「所在不明」、存在するが個人の方が所有されているなど種々の事情から私自身がまだ見ていないものについては「未見」として書名をあげた。

### ア行

赤坂山旅枕(作者不明)宝暦四年。写本一冊。京都大学。楠木正成がこもった赤坂城のことを記している。個人的な記事はいっさいなく簡条書にして、山や城跡や周囲の様子、また正成の事跡について詳しく記している。近世紀行と軍記物の関連の深さを示す作品であろう。

秋葉山道中記(作者不明)写本一冊。国会図書館。横本で「ヤトウ坂、ちや屋あり。それより、今川村、ちや屋有。名酒をうる」などと道中記

風の記述で名古屋から秋葉山までの往復を記している。個人的な記事はないが、記事は細かく資料として貴重である。

秋山紀行(浅川欽一等)〔未見〕活字本(「信越境秋山紀行」)あり。

浅間山の記(多湖安利)嘉永元年。写本一冊。東北大学。それほど長い作品ではないが素直で読みやすい紀行文である。宗教性はまったくなく、案内者もおらず友人たち数人で地図を見ながら迷いつつ登っている。道をたどる様子がよくわかって面白い。名作の一つである。

登愛宕山記(吉成信貞)〔未見〕一冊。国会図書館。

東下り富士一覽記(松山玖也)〔未見〕寛文四年。「国語国文」昭和二十八年四月号に翻刻がある。

あづまの高野詣(椎園)嘉永七年。写本一冊。東京大学。「空も晴やか

なれば、むなしく家にあらんよりは野山に遊んと思ふに、いでやまだ見ぬ東の高野山に詣んとて、みちのも遠からねば、三郎なる磯吉を伴ひて、下部ひとりを随へ、わりごを腰にして、家を出るに」と冒頭にあるように、明るい雰囲気と和文で綴られている。スケッチ風の挿絵も少しある。行く先の碑や宝物に興味を示すが宗教性はない。

天降山の日記（作者不明）〔未見〕天保二年。写本一冊。岩瀬文庫。

夷曲厄弘調星田妙見男山紀行（錢丸他）〔未見〕文化十二年。写本一冊。柿衛文庫。

伊勢採葉記（小野蘭山）文化元年。写本一冊（「紀州採葉記」と合）。岩瀬文庫。七月から十月にかけて駿河と伊勢の各地を巡る。採取したものをメモしている部分が多い。文章の部分は少ないが、山の石や草木がよくわかる。水害の記事などもある。

伊曾山の日記（小松春盛）元治元年。国会図書館。「磯山の日記」の意であろう。四国の室戸崎の近く、羽根浦や伊尾木、浮津の近辺の山や海岸を散策した紀行で、田畑にいる村人と会話をしたり、鰯料理を食べたりする楽しい旅である。風景と人心の美しさが伝わるようなのかさがあって、村の生活がうかがえる作品でもある。

伊豆の山路（竹尾寛齋）天保六年。写本四冊。筑波大学。むしろ熱海の温泉紀行ともいうべき内容で、登山の記事はない。名所図会風で、先行の紀行を多く引用している。

伊豆の山ふみ（作者不明）〔未見〕一冊。お茶の水図書館。

膽吹遊草（藤原孔彰）写本一冊（「湖東遊記」と合）。刈谷図書館。友人たちと名古屋を出発する。冒頭にその同行者たちの名や関係を明確に詳しく説明しているのは珍しい。雨の道を参勤交代の行列と前後しながら進む。伊吹山に着いて登り始めてからも、よく酒を飲んで一服し、行動が非常に積極的で走ったりよじのぼったりと勇ましい。また描写が具体的で旅や登山の様子が大変よくわかる。山を降りた後は竹生島を遊覧している。合冊の「湖東遊記」も同じ作者で漢文で同じ旅を綴ったもの。合一冊の題を「江山清楽」としている。「湖東遊記」によると採葉のための登山である。近代的といつていい正確な観察や記述の態度は、作者の博物学者としての性格にもよるであろう。

祖谷紀行（菊地武矩）寛政五年。写本一冊。国会図書館。安徳天皇伝説に興味をひかれて祖谷に赴く。平家の旗を見に行ったり、土地の人々に話を聞いたりしており、平家伝説や山間の村の生活がよくわかる。もしかやひひ、大蛇などについての話も記している。末尾に「祖谷雑記」として、土地の生活や風俗を簡単にまとめている。興味ある内容が多い面白い作品である。

祖谷日記（太田信圭）文政九年。写本一冊。徳島市立図書館。日本庶民生活史料集成第三巻に翻刻がある。かなりの長編で、冒頭に旅立ちの理由がギリシタンの宗門改めであることを記す。そのような公用の旅らしく記述は冷静で合理的であり、また行先々で歓待されている。山里の村々の様子がよくわかり、洪水のあとの描写、平家伝説など興味ある記事も

多い。連句も含む。末尾には外山三位光施の批評が付く。名作の一つといつてよい。

岩木登山記録(作者不明)(「未見」)写本一冊。青森県立図書館。

上野山の記(広瀬水順)安政三年。写本一冊。慶応大学。遊覧記で登山というほどの内容ではない。

宇津野山の勝記(山内豊房)(「未見」)写本一冊。高知山内家。

宇良富士の紀行(幻阿)寛政十一年。板本一冊。柿衛文庫。富士には登っていない。身延を経由している。河口湖からの富士の景を絶賛し、一種の美景論を展開している。帚木のことなど、橘南谿「東遊記」を引用して細かい描写をおこなっている。個人的な交流の記事が多い。

延山紀行雑記集(作者不明)写本一冊。岩瀬文庫。深草元政「身延の道の記」の注釈書である。冒頭から本文を引いて「身延」「雨そほふる」などといった語句をひとつひとつ解釈している。

登大台山記(仁井田長群)(「未見」)天保五年。写本一冊。神宮文庫。

遊大滝山記(作者不明)(「未見」)写本一冊。高野山。

大峯山上之記(小林藤丸)文化四年。写本一冊。国会図書館。冒頭に富士山のことを長く紹介し、それから大峯に出発した記事になる。やや大

げさな俗っぽい筆致で、蕎麦や大根おろしなど食物の記事が実に多い。「のぞき」と言われる山上の修行所の記述も詳しく山伏たちの様子もわかる面白い作品である。

押山行記(作者不明)(「所在不明」)写本一冊。乾々斎文庫。

越知山紀行(芥川玉譚)文政八年。写本一冊。内閣文庫。漢文紀行。記述は具体的に泰澄大師のこともいろいろと詳しい。末尾に、主君から老年だし無理をしなくてもいいと言われ、奮起して登山したことを記している。

御嶽山一石山紀行(竹村立義)文政十年。写本一冊。「江戸期山書翻刻叢書」所収。御嶽山登山の紀行で地誌的、雑記風である。信仰を批判し、独自の見解を随所に示すのが特徴である。

御嶽日記(小津久足)文政十三年。写本一冊。慶応大学。この御嶽は伊勢の「みたけ」である。作者の他の作品と同じ、優雅な和文で和歌も多く、あちこちで神社の由来などを記している。花見のための旅で途中で花がよく登場する。特に登山というほどの道ではない。

#### 力行

甲斐日記(清水浜臣)写本。「甲斐叢書」所収。文化の末の三月に富士山と身延山に登る。個人的な記事が多い。「槃遊余録」などをよく引用している。末尾の跋文に藤原知香の紀行論がある。この作者も近世紀行文の代表的作者の一人である。

笠置紀行(梶野良材)天保二年。写本一冊。国会図書館。作者は土佐守で家来たちとともに京都からの帰りに立ち寄って登山している。格調のあるしつかりした筆致で綴られ、故事の考証が多くてややうるさいが、山の風景や旅の様子は的確に具体的に記していて、その観察の鋭さと飾らない文章の正確さには驚かされる。字は非常にととのつていて読みやすい。

堅山難場道中記(作者不明)万延元年。写本。「江戸期山書翻刻叢書」所収。身延山と秋葉山に登る。メモ風のつくりわない記述だが、食べ物の記事が多く、愉快な楽しい旅で全体に生き生きとした奇妙な魅力がある。

蟹谷郷游記(津田鳳卿)〔未見〕一冊。「加賀能登郷土図書叢刊・近郊遊記」所収。

喜山遊覧集(道享道清)〔未見〕元禄四年。板本一冊。祐徳文庫。

木曾行記(松平君山)〔未見〕宝暦六年。写本一冊。無窮会文庫。

木曾採葉記(水谷豊文)文化七年。写本。国会図書館。記録風であるが時々動植物についての説明や「十一日。朝六ツ時比ニヤケ野ノ辺マデ登ル。ソレヨリ赤岩黒岩辺ヨリ上ニ至レバ寒気甚ク、春ノ花秋ノ花共ニ六七月ノ間一時花ヲ開キ、艸木ミナ尋常ノ品ト異ナリ木類ハ枝四方ヘ延テ上立セズ」などの文章が入る。挿絵もある。

遊霧嶋山記(田代安定)写本一冊。国会図書館。採葉記である。走り書きに霧嶋山の草木の名を分類して記す。整った作品ではなく備忘録のような体裁である。冒頭に天の逆針のことが少し長く記されている。

熊野案内記(作者不明)宝永二年。写本。東京大学。熊野の由来や道の距離などを項目をたてて記している。

熊野先生南山紀行(崖弘毅)寛政元年。板本一冊。早稲田大学。高野山に行った漢文紀行で目的は避暑か。項目にわけて具体的に山の生活や建物の様子を記している。

熊野日記(熊代繁里)安政六年。写本。碧冲洞叢書。かなりの長編である。山上で「こうせち(講説)」を毎日聞き、友人たちと飲み食いする。まさに「日記」である。信仰性はあまりない。登山の記事もこれといっていない。

熊野日記(大関増業)〔未見〕文化八年。写本。黒羽大関家。

熊野まうでの記(古屋菅賢)嘉永三年。写本。九州大学。熊野参詣が目的だが、宗教性はない。山よりはむしろ海に関する記事が多い。「板ばしを渡りくれば熊代繁里とて歌よむ人あり。富栄へたり。そこにやどるにあるじ心しらひして、よろづまめやかにもてなしぬれば旅の心地もせず」と「熊野日記」の作者の名が出る。

熊野詣之記(内山真龍)〔所在不明〕一冊。「神道分類総目録」による。

熊野遊記・熊野名勝図画（北圃恭著・木芙蓉画）寛政十三年。板本三冊。国会図書館。第一冊は漢文で熊野への旅を日付にしたがって記している。描写は細かく、温泉のことなども記している。第二・三冊は冒頭に簡単な名所の説明をした上で熊野各所を図絵で示している。図絵はやや同じような風景が多いが丁寧に書かれている。

雲わけ衣（作者不明）写本一冊。九州大学。大山、足柄山への登山。文は少し古風で大げさなところもあるが、明るく面白い。登山、入湯、舟旅と内容も盛り沢山である。登山の苦しみについてもいろいろと記し、宗教性もおおらかにうけいれている。名作の一つであろう。

乾山紀行（近松茂矩）宝暦三―四年。写本二冊。東北大学。名古屋の乾山侯に仕えた土が近郊の山に鹿狩りなどに行った時の記録。鹿狩りの資料になるが登山とは関係ない。

江山紀勝（山田東平）活字本一冊（明治以後のものか）。国会図書館。杉田の梅見の紀行などを集めたもの。山岳紀行ではない。

甲州こまぢの記（筠芽）天明五年。板本一冊。架蔵。冒頭に二人の娘をなくした悲しみのために身延参詣を思い立ったと記す。しかし、身延山の参詣の時は宗教的で感涙をもよおしているが、全体としては愛いがなく挿絵をまじえて街道の情報であれこれと紹介している。始めのあたりには風土人物に関する論もある。

甲州道中記（水野猶忠）〔未見〕写本一冊。東京博物館。

甲州道中記（霞江庵翠風）慶応二年。写本五冊。「甲斐叢書」三に所収。作者が甲州に滞在していた間に見聞した土地の風俗や自然などについて、名所図会などには書かれていないことを簡条書に記したもの。文章は読みやすい和文である。この土地では冬に他家を訪ねるとまず炬燵に入ってから挨拶をするなどと、面白い記事も多い。山地の自然の厳しさなどもしばしば描かれている。活字本では省いてあるが原本には図も入っているようである。

甲駿道中之記（吉田兼信）文政十三年。写本。「甲斐叢書」三に所収。作者の主君が武田勝頼の臣で、師の関明信がその墓参りに行く際の供を命じられて同行した折りの紀行である。日付にしたがって和歌や発句をまじえながら、歯切れよい和文で風景や風俗を綴っている。途中の茶屋で殺された狼を見て驚いている。勝頼の墓に参るあたりでは資料の紹介が多く、やや記録的である。帰途はまた山村の生活や、宿がとれずに困ったことなどを読みやすい和文で記している。

高野紀行（桐雨・浮流）安永四年。板本一冊。柿衛文庫。娘をなくして嘆く父とともに高野山に参詣している。宗教色はきわめて強い。しかし文章は明確でわかりやすい。

高野山紀行（山田清安）〔所在不明〕「国学者伝記集成」に見える。

高野山路之記（鳥丸資慶）元和八―寛文九年。写本一冊。「続群書類従」十八下所収。母の死後、その冥福を祈って高野山に参詣する。「やがて白雲の中に分入ぬ。左右茫々として、さきだつはかへりみる友をうしな

ひ、をくる、はしるべにまよふ。風のゆき、にやまきの梢おもかげばかり見へかくれて、しるべにせん松だにもなし」などの記述がある。和歌が多い。

高野山詣記（宗因）延宝二年。写本一冊。「校註俳文学大系紀行編」所収。「宿坊のもてなしなのめならず。其夜しも泉州尾崎の住吉清章参りぬ。同行加はりていと興あり」などの文章もあるが、ほとんどが連句である。登山の記事はない。

五山駢程見聞雜記（作者不明）天保九年。写本。「江戸期山書翻刻叢書」所収。雨降山と富士山、秋葉山に登る。淡々とした冷静な筆致で比較的簡単な記述といった印象をうけるが、リアルな挿絵が多く入っていて、それを補っている。

越の山つと（平千秋）寛政十二年。写本二冊。筑波大学。旅先で滞在している家の翁の話として土地の風物をいろいろ紹介している。挿絵があり、和文のていねいな筆致で、機織りのことや植物のことなどを述べている。

駒嶽一覽記（安藤政陽）元文元年。写本一冊。「落原拾葉」八に所収。公務の調査のための登山か。簡条書にして記録のように記してある。しかし内容は細かく具体的で、一行の顔触れ、途中の道の様子、鳥や花のことなど詳しい。引き返そうとした時、ここまで来たら頂上をきわめて帰ろうと話合って、再び登山する記事もある。はじめ思っていたより山までの距離が遠いのを笑いあったりするところもあり、姿勢は積極的

で明るい。

駒嶽一覽記（坂本運四郎）（未見）宝暦六年。写本一冊。高遠進徳。

駒嶽記（中村元起）（未見）「落原拾葉」八に所収。

駒嶽紀游（中村元起）「落原拾葉」八に所収。漢文紀行。冒頭、信濃に名山が多いことからはじめ、駒ヶ嶽には龍馬が育つなどの俗信を紹介している。友人たちとの楽しい雰囲気の旅だが道の険しさも詳しく記されている。もしかや雷鳥のことも出る。末尾に漢詩を数首付す。

登駒岳記（坂本天山）天明四年。「天山全集」上に所収。漢文紀行。山道の厳しさ、従者たちとの旅の苦勞、植物や鳥について記しているが、短い作品であり興味をひく記事はない。

遊金剛山記（岡直養）（未見）一冊。お茶の水図書館。

#### サ行

嵯峨山遊覽記（冷泉為村）写本一冊。岡山大学。嵯峨野の遊覽記である。和歌が多く、楽しい明るい作品だが登山の記事はない。

志賀の山越（狩谷竹軒）文久三年。写本一冊。金沢市立図書館。公務の旅である。志賀の山に登る部分はあるが、登山というほどのものではない。優雅な和文で和歌をまじえて綴られている。

松亭身延紀行(松亭) 万延元年。江戸から出発して身延に行く。途中、大戸観音や甲府の城趾などにも行き、帰途には伊豆に遊ぶ。落ち着いた丁寧な和文で、時には図もまじえながら旅の見聞を記している。

常野採葉記(小野蘭山) 享和元年。板本。国会図書館等。「日光採葉記」とも言う。筑波山、日光山などを巡る。「七日、湯本ヲ発シ赤沼ノ原逆降川小沢通ヲ経テ志津ニ至ル。此地ハ黒髪山ト太郎ヶ嶽トノ間ノ幽谷ニシテ民家ナシ。只籠寮二戸アリ。請テ旅館トス」などの記事が少しある。全体がメモ風の記録である。

諸州採葉記抄録(植村政勝) 享保五ノ宝暦三年。写本。国会図書館等。幕府の役人であった作者が薬草採取のため各地を巡ったときの見聞を記したもので、吉野山、石槌山、日光山、身延山、富士山、立山、鳥海山など、その足跡は広い。のちに「本朝奇跡談」として板行された。近世紀行文学史上、注目すべき位置にある作品である。書誌や位置づけについては拙稿「『採葉記』について」(福岡教育大学紀要38号)と国書刊行会叢書江戸文庫「近世紀行集成」解説を参照されたい。

遊神明山記(雪堂処士)〔未見〕板本(「詞林意行集」の内)。

駿甲間山駅紀行(作者不明) 写本三冊。都立中央図書館。横本で絵が多い。漢文もまじえながら山道の旅を綴る。京都や奈良の記事もある。明治期の作。

関の山ふみ(梁岳) 写本一冊。大阪市立大学。七十二才の作者が近江に

住む友人の僧を訪ねる折りに、大坂から日の岡、石山などを巡った紀行。比較的短く記述も型通りで簡単である。登山というほどのものはない。

#### 太行

高雄紀行(清水谷実業) 写本一冊。国会図書館(「高雄山巡覧記」で収録)。短い紀行だが、友人たちと紅葉を見に行く遊覧記で、美しい紅葉がよく登場している。土器投げのことなども記してある。

高雄山巡覧記(中院通茂) 写本(「扶桑残玉集」四の内)。宮内庁書陵部。清水谷実業「高雄紀行」と同じ時のもので、内容もほぼ共通する。優雅な和文で美景を描き、短い作品であることも共通している。

高雄山巡覧記(作者不明)〔未見〕写本一冊。神宮文庫。

遊高雄山記(作者不明) 嘉永五年。写本。東京大学。漢文紀行。山路の描写などが少々ある。また高雄山の「八景」にもふれている。

高雄山に紅葉を見る記(高松重季) 享保二十年。写本。国会図書館。非常に短い作品である。和歌をまじえて地藏院や、その後足をのびした梅の尾などの紅葉の風景を描いている。高雄では紅葉を見にきた人々が多く、酒など飲んでにぎやかに遊んでいることが記されている。

高千穂行記(栗原信充)〔未見〕元治元年。写本一冊。東京大学史料編纂所。

高千穂日記（磯屋久樹）〔未見〕天保十年。写本一冊。天理図書館。

立山紀行（佐藤月窓）寛政十年。写本。「登山の夜明け」所収。冒頭に旅が好きで各地を巡ったが最近病気がちで、登山もためらっていたが、人に誘われて出発したことを記す。以下、和歌を交えてややめりはりの強い文章で登山の様子を記していく。女人禁制を冒した女性の伝説や、宿泊客のやかましさへの怒り、地獄谷の恐ろしさなど、また山の由来なども紹介する。故事もしばしば引用している。感情の豊かさ強い個性が感じられる作品である。

館山紀行（鞠亭政遠）写本一冊。慶応大学。安房の「館山」行で登山はない。明治期の作品である。

館山紀行（泊志）写本一冊。東京大学。安房の「館山」行で登山はない。序跋は明治のものである。

登立山記（大塚新左衛門）天保十一年。写本一冊。金沢市立図書館。漢文紀行。記述は具体的で冷静であり、山の全体像をよくとらえている。宿の汚さなども描いている。

秩父行記（大槻西磐）〔未見〕板本一冊（「講暇遊録」の内）。

長嘯山之記（作者不明）写本。静嘉堂文庫。「方丈記」風の随筆である。紀行とはいえない。

筑波紀行（柳九）宝暦五年。板本一冊。「校註俳文学大系・紀行編」所収。短い作品で「むなしく光陰を送るにつけて、しきりに鹿島立の願ひおこりて其のとし弥生のはじめ旅ごゝろ定りぬ」などと、文体には「おくのほそ道」の影響がある。登山の様子や眺望などが簡明に記されている。

筑波紀行（蓼太）〔未見〕天明元年。板本一冊。「校註俳文学大系・七部集総覧編」所収。

筑波紀行（作者不明）〔未見〕写本一冊。大阪市立大学。

筑波紀行桜之実（作者不明）〔所在不明〕。享保五年。「俳諧書籍目録」に見える。

筑波行記（安藤為実）元禄三年。写本一冊。「片玉集」八十七の内）。宮内庁書陵部。水戸藩で編した「扶桑拾葉集」を都へ送る使いの折りに登山している。和歌を交えて山上からの眺めや水戸から海路を経て、杉戸から江戸にいたる道すじのさまを描いている。飾らない素直な筆致で見聞を記している。水戸公の狩場のことなども出る。

筑波山紀行（土屋英直）写本一冊（「片玉集」四十七の内）。宮内庁書陵部。神無月の登山である。前に一度行っており、そのせいか短編だが肩ひじはったところのない、ものなれた書き方で、出発から登山して帰宅するまでを綴っている。北条の旧跡のことや田楽もちの名物を食べたことなどが記されている。



遊筑波山記(小宮山昌秀)文化十五年。写本一冊。国会図書館。しつかりした、わかりやすい和文で記され、記事は詳しくていいのである。冒頭に筑波山を常に見ていて登山の志はありながら、長い年月いろいろと都合があつてなかなか果たせなかったことを記し、老いていて足が弱く疲れやすいとしばしば述べている。権現が仏化していることについての批判がある。狂女についての記事など興味ある内容も多い。

遊筑波山記(作者不明)〔未見〕写本一冊。文化十四年写。大正大学。

登筑波山詠歌并短歌(作者不明)写本一冊。大阪市立大学。横本に備忘録のような走り書きで、筑波山を詠んだ長歌や短歌を記している。

つくば路の記(中島広足)写本一冊。慶応大学。九州紀行であつて、特に登山の記事はない。

筑波の記(南湖庵)宝暦三年。写本一冊(小宮山昌秀「遊筑波山記」と合)。国会図書館。「思ふどち打つて」筑波山に登った紀行で、記述は具体的で明確であり宗教性は特にない。また感情描写が少なく冷静な態度が目につく。「又も巖壁大嶮成所をのぼりて稲村が嶽権現に至る。経る道のさかしき事壁崖万丈眼をまよわす也。血氣絶なる達者年若の人ならで自由の往還は誠に成がたし。不達者、或は老人幼少のもの、通はならぬ大嶮難也。則此所を劔が峯と云也」などの記述がある。

丁丑甲斐日記(作者不明)文化十四年。写本一冊。九州大学。八月の末に江戸を立って八王子、川田などを経て、犬目、鶴川に至っている。日

付にしたがつて、やや記録めいた文体で記している。食べ物のことが多く出る。登山の記事はない。

天山日記(阿蘇惟敦)文久元年。写本。東北大学。熊本から長崎の道筋が中心。主君の祖先の墓参りであるが、山がなかなか見つからなかったことを記している。描写は具体的でわかりやすく、墓の様子もよくわかる。天気が悪くてあまり眺望はよくなかったと記している。九州紀行としても、すぐれた作品である。

登嶽日記(栗本鋤雲)弘化三年。写本。「帝国文庫・続紀行文集」所収。富士山と金峯山に登る。公務のためであつてか、文体は記録的で漢文調であり、また社会的な観点からの考察が多い。登山の苦しみも描かれている。

踏雪日録(宮部鼎蔵)嘉永四年。写本。内閣文庫。漢文紀行。記述はメモ風で簡単である。日光山、男体山、筑波山に登る。登山の苦労や眺望のよさなどの記事がある。

登山録(原伍軒)〔所在不明〕一卷。「近世漢学者伝記集成」による。

梅尾山遊記(金竜)〔所在不明〕一冊。「明和書籍目録」による。

#### ナ行

苗場山に遊ぶ記(鈴木牧之)文化八年。板本。「帝国文庫・続紀行文集」所収。短い作品だが漢文調の歯切れいい文体で登山の苦労や風景の美し

さを記している。

中山まうでの記(田中千箭)(未見)天保四年。写本一冊。柿衛文庫。

夏の山(以哉坊編)(未見)宝暦十一年。板本一冊。柿衛文庫。

並山日記(黒川春村)写本三冊。東京大学。「甲斐資料集成」に収録。冒頭に紀行文論がある。内容も面白く、美しい彩色図が多数ある。

成田紀行(石川雅望)(未見)文政五年。写本一冊。神宮文庫。

西山紀行(禹白堂仙牛)天保十四年。写本。東京大学。登山の記事はない。句が多く明るい雰囲気の記事である。

日光山志(植田孟縉)天保八年。板本。「日本図会全集」に収録。特に山の描写はない。日光について、滝などの美景や各所の由来を紹介する。図が多い。鳥丸光広の紀行を引用する。

韭生の山つと(小松常磐丸・嶋村真春)文化十一年。写本一冊。国会図書館。四国の大湊の家から友人二人で旅立つ。九月のことで村祭りの様子などが描かれている。平家伝説に興味を持って深山の奥まで訪ねていつている。和歌をまじえて落ちついた記述で山道の様子を綴っている。

後駒ヶ嶽一覽記(坂本英臣)宝暦六年。写本。「路原拾葉」八に所収。駒ヶ嶽見分のための公務で登山している。簡条書にして川や谷の様子を

詳しく記す。また人足たちとのやりとりや、彼らが山男の足跡とおびえているものが熊の足跡であると予測して調べる記事などもある。

野山の家づと(鈴木孝道)(未見)早稲田大学。

#### 八行

陪遊笠置山記(斎藤拙堂)(未見)「増補紀行文集」に所収。

白雲山記(板倉勝明)写本一冊。静嘉堂文庫。漢文紀行である。江戸から安中の城に帰る間の山道の様子を描いている。特に金洞山の石門のことを、図もまじえて詳しく書いている。それほど長い作品ではない。

白山紀行(作者不明)写本一冊(「天香楼叢書四二」の内)。筑波大学。「今年庚申夏六月白山に登らんことを催して金沢を立」と冒頭にある。具体的で無駄のない正確な描写で、白山の清々しさがよく表現されている。強力のあるさまよく描いている。天候が悪かったため、朝日を見られなかったのを惜しむ記述がある。

白山全上記(案山加賀)文政十三年。写本一冊。岩瀬文庫。冒頭に幼い時から白山に登りたかったことを記し、以下、持参すべきものからはじまって、図をまじえながら周到に白山登山の道筋や途中の名所を説明する。記事は感情をまじえず客観的で、非常にわかりやすく親切である。この面白さが文学的なものかどうかは難しい問題であるが、実用書としてすぐれた作品の、潔さと快さを読者に与える作品である。

羽里山詣記 (作者不明) (未見) 一冊。東北大学。

始入華山至西峰記 (作者不明) (未見) 一冊。竹清文庫。

春の山路 (宮永正建) (未見) 天明六年。板本。無窮会文庫。

春能山都登 (高林方朗) 寛政八年。写本。「碧冲洞叢書」所収。秋葉山参詣の紀行である。ほとんどが和歌で、特に登山の記事はない。

春山踏 (浅見句竜) 明和三年。板本一冊。無窮会文庫。「南朝紀行」の角書がある。吉野紀行で句が多い。馬子とふざけあったりして、明るく楽しい雰囲気である。

遊盤陀山記 (熊坂台州) 明和七年。写本一冊。福島県立図書館。漢文紀行。友人とともに登山し、山道の険しさや眺望のよさ、山間の村などについて記している。

遊彦山記 (石川剛) 寛政六年。写本一冊。東北大学。冒頭、彦山の由来からは始めている。記述はそつなく正確である。登山の苦労や眺望の良さを記しているが、信仰や宗教といった色彩はない。

飛驒行 (物外) (未見) 写本一冊。高山郷土資料館。

記飛驒三奇 (作者不明) 写本一冊 (「片玉集」七十二の内)。宮内庁書陵部。漢文。寛政五年、同十一年の奥書がある。飛驒の人から寄せられた

「三奇之図」に文を付したもので、山や谷の険しさ、特に深い谷を綱を張って籠をつるして人を渡す「籠の渡し」の難所について詳しく説明している。

富嶽記 (秋山玉山) 「落原拾葉」八に所収。漢文紀行。短い作品だが、道の険しさなどを記している。かぐや姫伝説と富士の人穴といわれる穴に入ったときのことと記されている。七月から八月にかけての登山である。

富嶽雪譜 (和久田叔虎) 享和三年。写本。「江戸期山書翻刻叢書」所収。すぐれた富士登山の記である。徹底的な探究心で富士を観察し、合理的科学的立場から強力をもらかっている、自信にみちた冒険記といっている。風俗もあり、博物もあり、風景美についての見解もあり、あらゆる方面から富士にせまっている。傑作の一つである。

登富嶽記 (北沢恕) 寛政十一年。写本一冊。「片玉集」七十六の内)。漢文紀行。友人たちと登山する。六月末の登山だが、風雨に悩まされており、寒さや飢えにも苦しめられている。といって感傷的ではない。天候の悪い時の登山の様子がわかる。

登富嶽記 (吉村幹斎) (所在不明) 「近世漢学者伝記集成」による。

富嶽之記 (中谷順山) 享保十八年。写本一冊。東北大学。明るい筆致で記されており、描写はきわめて具体的である。食物や着物のことも詳しく、登山の様子がよくわかる。

富士一覽記(梅月堂宣阿)板本。「帝国文庫・続紀行文集」所収。それほど長い作品ではない。漢文調の文体で、和歌をまじえている。ユーモラスな記述も少しある。

不字賀嶺日記(寛貞)文化十四年。一帖。国会図書館。友人の養房に誘われて出発している。和歌をまじえて落ち着いた筆致で江戸からの道を記している。登山する人々との交流なども記される。帰途は東海道路に出て海辺の風景を楽しんでいる。

富士記(大庭維景)寛政六年。写本一冊。筑波大学。冒險的、行動的な姿勢を貫いており、記事は具体的で宗教を強く否定している。剣峯の絶頂に至っている。後記で伊藤東涯「轡軒小録」や新井白石「観遊記」を引用している。

富士記(立圃)写本一冊。国会図書館。登山はしていない。俳文といってもいい短いもので、海道から見た富士の素晴らしさを綴っている。人々がその美しさに感動するさまざまなことも記して、「たびの命毛」などと同様、道から見上げる富士に心ひかれる旅人の心理がよく表現されている。

富士記(秋山玉山)(未見)写本一冊。関西大学。

富士紀行(和久田叔虎)(所在不明)写本一冊。乾々斎文庫。

不二紀行詩(大森君欽)天保二年。板本一冊。大阪府立図書館。岡鹿門など十四名の富士山を詠んだ漢詩を集めた漢詩集である。

富士山紀行(有馬新七)(未見)安政四年。「有馬新七先生伝記及遺稿」に所収。

遊富士山記(平沢元愷)(未見)板本。「増補紀行文集」所収。

富士山上記(伊藤常足)(未見)写本一冊。神宮文庫。

富士山に登るの記(竹村修)天保十二年。写本一冊。岩瀬文庫。整ってしっかりした文章でありながら、時には「雲の透間より高根を仰ぎ見れば、鼻の穴が天に向く程なり」などと俗っぽい表現も用いて、生き生きと登山の様子を綴っている。中山高陽の紀行も引用している。空が赤いので火事かと思ったら月の出だったなどと印象的な記述が多い。格調も活気もある、すぐれた作品である。

不尽山記(岡部東平)天保十四年。板本一冊(在融「不二日記」と合)。頭注を付して淡々と旅の様子を綴っている。

富士登山記(中山高陽)写本一冊。国会図書館。安永の頃、熱海に入浴した時に見た富士山にぜひ登りたいと考え、帰宅した後、友人を誘って登山したと冒頭に説明する。富士の地勢や気候、頂上からの風景などを比較的あつさりとした筆致だが、正確に観察して記している。

富士登山日記(松海)(未見)一冊。福井久蔵。

富士日記(池川春水)明和五年。写本。清水孝之氏の翻刻がある。清水

氏が解説で指摘するように合理的、科学的な姿勢を貫き、強力らと対立して俗信を否定する痛快さに特徴がある。歯切れのよい明確な文体で登山の様子を記し、随所で自己の見解を示している。山岳紀行の作者たちにはしばしばこうした姿勢が見られ、それが作品の面白さともなっている。

富士日記(賀茂季鷹)寛政二年。写本。「甲斐叢書」所収。個人的な記事が多く、和歌をよく記している。修行者たちのさまも記すが、冷静な筆致で特に宗教性は強くない。

富士日記(成嶋峯雄)〔未見〕天明八年。写本一冊(片玉集「五一の内」)。宮内庁書陵部。

富士日記(芙蓉亭蟻乗)文政六年。写本三冊。「江戸期山書翻刻叢書」所収。作者は狂歌師で鍛冶屋、富士講に帰依していたという。少し俗っぽい熱心で精力的な記述で、記事も雑多だが細かい。登山の様子がよくわかり面白く読むことができる。

不二日記(在融)板本一冊。東京大学。上部の空欄に頭注がある。和文で比較的淡々と旅の様子を綴っている。

富士の詠(作者不明)寛政五年。写本一冊。架蔵。公務で東行した佐賀藩士の紀行である。ほとんどが句集で、富士は通り過ぎる途中で眺めて句を詠んでいる。「そも西肥を立出る日より名山の風色こゝろにかゝり、見付のほとりより猶もたのしみ来りつ、名にしおふ富峯を眺望すれば

生涯の本懐こゝに足れりと、時うつる迄仰ぎ仰げば、いでや駒をはやめよと従者が」の詞書がある。

富士の道の記(礎山)天保十四年。写本一冊。新潟大学。国書総目録には見えない。子どもに代わって富士山へお礼参りをしたものの。軽妙な文体で具体的な説明をして、旅の様子がよくわかる。持参した酒の徳利に女性の名をつけて愛用したり、途中で見かけた女性の美醜を戯文めいた筆致で批評するなどユーモラスな部分も随所にある。名作の一つである。

富士之夢(堅木)享保五年。写本一冊。京都大学。東海道の紀行文が中心で富士は海から眺めている。

富士見紀行(内山逸峰)明和八年。写本。「内山逸峰紀行文集」所収。富士山には登っておらず、東海道の旅が中心。和歌が多く、記事は和文で簡単である。身延山の記事が少々ある。

富士見日記(江沢講修)天保五年。写本一冊。岩瀬文庫。療養のために箱根や熱海の温泉に行ったときのもので、富士登山はしていない。街道や日金山などからしばしば富士を眺めて、その美しさを嘆賞している。

富士詣行李の友(原義胤)写本一冊。国会図書館。母とともに旅行している。山梨のあたりでは葡萄園の記述もある。武田勝頼の古跡なども訪れ、土地のさまざまな伝説なども細かく記して興味ある内容である。

富士山根之記(滝口泰親)〔未見〕写本。尊経閣文庫。

芙蓉紀行集（作者不明）〔未見〕写本一冊。静嘉堂文庫。

古山日記（作者不明）写本。「甲斐叢書」所収。記録であつて紀行とはいいがたい。

烽山日記（亀井照陽）〔未見〕文化六・七年。写本三冊。九州大学。

暮秋山ぶみ（井伊直弼）〔所在不明〕天保七年。一卷。「諸大名の學術と文化の研究」による。

本宮山眺望之記（柴田善伸）文政五年。写本一冊。岩瀬文庫。

盆山御記（家仁親王）延享三年。写本一冊。宮内庁書陵部。「近世紀行日記文学集成」一（津本信博編）に所収。「嶋陰盆山之記」とも。ある女性から贈られた盆石について記したもので登山とは関係ない。

#### マ行

真間紀行（川井忠静）天明二年。写本一冊（「片玉集」七十五の内）。宮内庁書陵部。漢文紀行。友人とともに春三月に出発する。山道の險しさや遠山の眺望などを記す。風景描写が多い。山を降りると海岸の村で塩を焼くのを見たり、村の人々とともに餅を食べ酒を飲んだりしている。それほど長い作品ではないが、明るく楽しい雰囲気である。

真間紀行（光徳）天保十年。写本一冊。船橋図書館にあったが戦災で焼失。

真間山紀行（作者不明）〔未見〕写本。金沢大学。

真間の道芝（和田正）天保五年。写本。都立中央図書館。冒頭に舟旅の様子を詳しく記す。手古奈神社のことなどもある。特に登山というほどのことはない。図が少々あり、末尾に歌を記し、もみじの葉を貼っている。

真間の道記（作者不明）〔未見〕一冊。

游三国嶺記（津田鳳卿）文化九年。「加賀能登郷土図書叢刊・近郊遊記」所収。漢文紀行。風景描写も多いが、しばしば古書を引用して歴史上の旧跡に興味を示している。

三峰詣記行（富田永世）〔所在不明〕「埼玉名家著述目録」による。

三の山巡（芙蓉亭蟻乗）文政六年。写本三冊。「江戸期山書翻刻叢書」所収。白山、立山、富士山に登った紀行。記述は具体的、地誌的で、科学的姿勢が強く、風景描写も新鮮である。末尾に無事帰宅した喜びを「うれしさを何といはつの奥深みねがひもみつの山めぐりして」の和歌に詠んでいる。

三の山ふみ（平松英棟）〔未見〕天保十五年。写本一冊。穂久邇文庫。

身延鑑（作者不明）貞享二年。板本。「近世文学資料類従」所収。序文は「かゝる靈地をしる人まれなるによりて、一帖之絵草紙にして置ぬ。

然らば歩みを運ぶ人のためにもならん」と案内記としての意図を示すが、内容は冒頭から「せめて世を逃し甲斐の身延山にまいり、祖師の御真骨をおがみ奉らんと思ひたち、心を友として此年延宝四丙辰の弥生の空、九重のみやこを出」と紀行文の体裁をとり、山道の描写などもよく出る。名所図会や案内記にはこのようなものがしばしばあり、分類や定義に一考を要する。

身延紀行 (作者不明) 写本一冊。東京大学。稿本風の走り書きである。句が多く、まとまった文章は序文の部分のみといってもよい。

身延紀行 (筠芽) (未見) 天明五年。板本一冊。柿衛文庫。

身延紀行 (鈴木文台) (所在不明) 一卷。「近世漢学者伝記集成」による。

身延紀行 (中村経年) (未見) 一冊。国会図書館。

身延紀行 (林潜斎) (所在不明) 「近世漢学者伝記集成」による。

身延山紀行 (林鐘) 文政十三年。写本一冊。岩瀬文庫。冒頭に、最近流行している「膝栗毛」のような戯作ではなく旅したことをそのまま書きつけただけのものと記す。以下時に図をまじえながら、第一巻は身延山をはじめ東海道、鎌倉、金沢などについて述べ、第二巻では甲州街道から木曾路を通って京都に達し、更に伊勢まで案内している。名所図会のように箇条書にする部分もあるが、日付にしたがって記す一人称の紀行文の体裁になっているところも多い。稿本のように字もややよみにく

いが、旅の様子などもよく記している生き生きとした作品である。

身延山久遠寺詣日記 (小林文五郎・保蔵) 弘化二年。写本一冊。東北大学。安(保)蔵という男が身延山に参詣したまま帰らず、出家したいと言いつたので連れ戻しに行った旅のようである。記述は簡単だが、結構明るい雰囲気、笑っている場面が多い。挿絵が少々ある。

身延の記 (作者不明) 写本一冊。宮内庁書陵部。「右身延記一卷土肥芦角子の本をもて写し畢」の奥書がある。内題は「身延のみちの記」、内容は深草元政の「身延道記」の写しである。

みのぶのしるし (作者不明) 写本一冊。九州大学。作者は女性。藤づるの橋を恐れる程度で登山の苦労はあまり記されていない。日記的な素直な記述で、宗教的なことがらにも素朴に感動している。

身延のみちの記 (伊達正宗) 写本一冊。金沢市立図書館。内容は深草元政「身延道記」の写しである。天保八年書写の奥書がある。橘南谿「東遊記」の書き入れもある。

身延道記 (深草元政) 万治二年。板本一冊。架蔵。身延山の参詣記で東海道の記事が多い。富士の描写も少しあるが、特に登山の記事はない。日記調で歯切れよく綴り、それほど詠歎的ではない。

見瀬山道の記 (中野惜我) (所在不明) 一卷。「近世漢学者伝記集成」による。

## ヤ行

山かつら（高柳信之）〔所在不明〕一冊。「国学者伝記集成」による。

山里の記（村田春里）〔未見〕写本。大東急記念文庫。

山路の日次（千家尊澄）嘉永六年。写本。無窮会文庫。中国地方の八重山の登山であるが、山登りの記事はほとんどない。

山つと（藤井高尚）寛政七年。写本一冊。岡山県立図書館。自宅近くの郷谷というところの風景がよいと聞いて、遠い所には行けないからと花見をかねて友人たちと出発する。山行の一傾向がうかがえて面白い。途中で酒を買いに立ち寄った店の幼い子どもがついて来たがったのでいっしょに連れて行く、のんきで楽しい物見遊山の旅である。

山中記行（作者不明）写本一冊。金沢市立図書館。山中温泉の入湯記で特に登山のことはない。

山中行記（金谷孔彰）〔未見〕写本一冊。金沢市立図書館。

山中日記（永田済美）〔未見〕文政十三年。一冊。岩瀬文庫。

山中遊記（林瑜）〔未見〕写本一冊。金沢市立図書館。

山道行記（可楽）宝永三年。板本一冊。国会図書館等。江戸から岡山までの紀行文。中仙道の記事が中心で、特に登山の紀行ではない。

山道遊記（岡田橋）写本一冊（「西遊雜記」と合）。静嘉堂文庫。漢文紀行。江戸から出発して中仙道を通って関が原に至る。地名ごとに項目をたてて、風景や風俗、故事などを詳しく記している。山道の様子、また妙義山などの遠望についてもよく記している。

山分衣（山崎弘泰）天保十二年。写本一冊。「登山の夜明け」所収。「越白山紀行」の角書がある。公務の折りに足をのばして白山に登っている。作者は大変大胆で、村人が険しい道だから無理だろうというのをあえて登り、途中の道の危険な様子を細かく記している。雷鳥をとろうとして、その手助けに連れてきた男が途中で道の険しさをおそれて進めなくなったのに怒って追い返し、山上では神官の止めるのも気にせず雷鳥を追い回して、石で殺したり、雛をとって帰る途中なくなったりしている。女人禁制を破った女性の話も少し出る。それほど長くはないが面白い作品である。

遊毛記（小野蘭山）享和元年。板本。国会図書館等。採薬記の代表作の一つである。書誌等については「諸州採薬記抄録」に同じ。筑波山、日光などを訪れている。採薬記には草や石の名を記録しただけのものも多いが、これは紀行の体をなしており、土地の伝説などいろいろな紹介している。また描写は具体的であり、山登りの様子も記している。

## ラ行

両山紀行（禹白堂仏牛）天保五年。写本一冊（「西山紀行」と合）。東京大学。「靈鷲舎心」の角書があり、この二つの山に登った紀行である。よく食べて飲み、疲れてもすぐ笑う陽気で明るい旅である。宿の老婆の



悪口があつたり、「四国巡拝のもの石を枕としてふし居たり。いかにや  
といへど、身つかれたるにや声も出やらず。哀れ妻子のたすけもなく誰  
ありて亦ひと里には導んと、いと断腸の思ひをすゝむ」と行き倒れの  
修行者のことなども書いてゐる。俳句が多い。